



TITLE:

雑報

AUTHOR(S):

CITATION:

雑報. 地球 1927, 7(6): 486-493

ISSUE DATE:

1927-06-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/183275>

RIGHT:

新著紹介

松本文三郎著

○東洋文化の研究

大正十五年十一月、岩波書店發行
定價二圓五十錢

これは松本博士が、最近數年講學の餘に成る論文十八篇を採次して出されたもので、地理學者には縁の薄いものであるしかし、古代支那の鐵器について、又は琉璃考などいふ考古の論文は人文地理學を專攻するものには一讀すべき論說であり古代埃及の藝術に關して先生の該博なる考證のごとき、後進の以て學ぶべき多くのものがある。偉人玄奘渡天の業跡をたゞへて、密教史の研究に炬火を投ぜられたこの種の智識は、東洋の地理を學べんとする人には必要であると信ずる(藤田)

○埼玉茨城群馬三縣下に於ける指定史蹟

昭和二年三月、内務省發行

この史蹟調査報告第二冊は柴田常恵氏の執筆であるらしい吉見百穴、船塚山、常陸國分寺、多胡碑、山上碑、金井澤碑上野國分寺等十一篇が収めてある。關東平原の東北に存する先人文化の跡を明にして、之を後昆に傳へんとするものである。考古學者でなくとも、一應はこうした報告によつて郷土を知るやうに心掛けねばならぬ。(藤田)

○日本の民家

今和次郎增訂版

昭和二年四月十五日、岡書院發行
定價三圓五十錢

今氏の獨得のスケッチと、流麗な叙述とによつて、我國で最初に日本の民家を研究した手頃の本であつたが、今度之を

増訂して出された。初篇には民家の構造間取等が論じてあるしかし語つて未だくはしからず、史的考察が殆ど缺如してある恨がある。次の中篇の繪と説明はいかにも珍らしい民家が集めてある。これもさうしたものと分布に關する考察が缺けてあると思ふ。ほつり／＼とこゝにこうある、あすこにこうあると聞かされてゐるに止まる。予は著者にこうした民家の相互の關係とか、其發達した系統とかいつたものを、著者の自序の中にあるやうに、早く(第二次の本を)書いてもらひたいと思ふ。しかし人文地理を學び日本の民家を研究せんとする人の必讀の書であることは予の贅辭を要しないことである。再版の出たことを非常に悦び、岡書院の努力を買つてよいと思ふ。(藤田)

雜報

○伊豆湯ヶ野附近に於ける二三觀察

天城峠の長いトンネルを越えて、坦々とした阪道を下ると、河津川上流に梨本村字萩乗と云ふ小さな部落に出る。萩乗の瀧より下流に點々として僅かの人家がある。そして其處には西北から落ちる一支流との合流點に其聚落をなしてゐる。谷は深くして、兩側に急傾斜をなす山側を、丹念に階段を作り(重に南向斜面即左岸)其處には一分の隙も餘さず畔を作り畑地としてある。そして麥を蒔いてある、畔は稻作の用意であり又斜面の崩壊を防ぐ爲であらう。街道から見下せば非常に美しく見える區切には地面の都合で丁度小さな皿程にも思はれる個處をも殘さず畔が作つてある、其殆ど無駄のない勤めな

開拓の狀は誠に山間の僻地らしく涙ぐましくさへなる。

斯る狭い平地と云平地さえもない土地を自分達の安住の地となす爲には如何に彼等は、自然の暴威と戦ひつゝ其に反抗し征服する爲にどれ程苦心努力した事であらう、そして、一朝大雨でも降れば斜面を落ちる流水の爲に苦しめられる事であらう、又火山岩の風化岩層は容赦なく谷底に崩れ落ちて来る、現在河津川右岸の階段狀畑地の一部は無慘にも其岩屑の爲に埋れてゐた。

然し村落の何處の家を見ても、かなり裕富らしく見える、僅の民家ではあるが皆相當に揃つてゐる様に見えた、そして何處となく平和な村らしく見えた、始終お互に苦しめられてゐたなれば、そして外界との交通不便な僻地には一村團結の愛郷心は強いであらう。

今一つ眼に付いたのは、各民家の家根は四阿式であつて、家根の頂部中央には切妻の樓烟出しが着いてゐる。そして此型は萩乗部落の殆ど全部が其であつて、下流の湯ヶ野、谷津にもなく萩乗特有のものであつた。他の村には四阿型のみで唯谷津の海岸に近い處には切妻型のものが散點してゐるのが見受けられる(稀には仙村にも樓烟出しのある四阿もあるが)斯く上流から下流へ、樓烟出し付きの四阿から普通の四阿へそして切妻へと移變して行く様にはなんか深い理由があらう。

私はほんの一日の行程にて唯皮相の觀察に過ぎないが若し自分の愚説を述べしめるならば、此地に於ける最古の河口移

住者は樓烟出四阿の民族でありとして、其次には普通四阿の部落移住者が來り、青參者の先住民を上流へ追込めてしまつたと解して見たい。そして追込られた民族は遂に山間の狭い斜面を開拓して自分等の安住地となさなければならぬ古代の天城は、現在の様に容易に越えられない、故に此不便な不安な土地によつて生活を營まなければならない、斯る地理的環境と人種的闘争とに支配されて、勤儉、平和の人情美は益々強く大きく培はれ行くべきである。

書き残したが切妻は普通四阿の後の最近の移住者の型であらう、記して參考迄に。昭和二年二月八日(船越素一)

○岡山縣の人口移動概要 大正十四年國勢調査報告

によれば、過去五ヶ年間に於ける全國人口増加の割合六七%なるに、岡山縣の増加率は僅かに一七%(滋賀も同じ)にして府縣中の四十二位にあり、減少したる沖繩、福井を別にし、は石川、鳥根、佐賀に優るのみなり、今その理由を少しく調べて見る。

郡市別人口移動總覽 (一)

要項	郡市		地形		大正九年と十四年との比較		十四年密		主要都會
	岡山	上道	平地	同	増%	減%	單位百人	度方里	
	二七	一三					二四一三	五八	西大寺

全 國	全 縣	眞 庭	久 米	英 田	勝 田	苔 田	阿 哲	川 上	上 房	後 月	小 田	吉 備	淺 口	都 窪	御 津	赤 磐	和 氣	兒 島	邑 久
		同	同	山 陵 地	丘 陵 地	平 地	同	同	山 地	同	丘 陵 地	同	同	平 地	同	同	山 地	同	丘 陵 地
六 七	一 七	七			九	一 二	五 六	三 五	一 三		五			六 二	七		一 二		
			八	五				一 五		五			二 五			二		一 五	一 五
二 四	二 七	一 一	一 八	一 六	二 一	一 五	一 八	一 六	三 一	三 八	四 九	二 七	八 五	九 八	二 〇	二 一	一 八	五 八	三 九
		勝 山	福 渡	林 野	勝 間	津 山	新 見	成 羽	高 梁	井 原	笠 岡	總 社	玉 島	倉 敷	金 川	瀬 戸	三 石	下 津	牛 窓

第七卷

第六號

四八

六八

眞 庭	久 米	英 田	勝 田	苔 田	阿 哲	川 上	上 房	後 月	小 田	吉 備	淺 口	都 窪	御 津	赤 磐	和 氣	兒 島	邑 久	上 道	岡 山	郡 市		要 項
一 〇、 六	一 二、 〇	一 一、 八	一 〇、 八	一 一、 四	一 一、 六	九 、 九	一 〇、 〇	九 、 七	七 、 三	七 、 五	六 、 九	六 、 九	八 、 七	一 二、 二	五 、 五	六 、 〇	五 、 四	六 、 五	六 、 五	生、 死の 増減 %	大	正
四 二	三 七	二 九	一 六	五 五	三 〇	八 一	五 〇	五 七	四 七	五 五	一 六 三	四 七	三 〇	四 七	一 三 五	三 六	九 七	五 四 九	五 四 九	入 寄 留 %	十	三
一 七 五	一 九 七	二 二 三	二 一 五	二 〇 一	二 六 三	二 四 七	一 九 二	一 五 三	二 六 〇	一 六 七	一 八 二	二 四 六	二 一 一	一 八 七	一 二 〇	二 一 一	一 九 八	二 一 八	二 一 八	出 %	年	・
八 八 六	八 五 九	八 三 三	八 三 〇	八 九 九	八 〇 五	八 三 二	八 七 九	九 一 一	八 二 四	八 九 九	九 八 八	八 三 二	八 四 六	八 七 四	一 〇 二 四	八 四 六	九 〇 七	一 四 九 五	本 籍 に 比 し 現 住 人 口			

備考 出入人口と、生産増加とな加減したるものが、本籍現住人口比に一致せざるは、現住人口を基礎として千分率を求めたる爲なり。

以上の二表につきて 精査、考察を試むべし。

岡山市は本縣の中心都會にして、商工業も繁榮なる爲増加率最も大なり、且つ寄留者は全人口の三分の一を占むるは都市集中の好例を示せり。

都窪郡の増加率六二%は、大正十三年の統計にては其故を知るに由なきも、郡内倉敷町は隣接村と合併し近く市制を敷かんとする程度に發達し、紡績工場とそれに伴ふ各種の施設とが過去數年間に於て著しき發展を遂げたるによるものならん。

上房、阿哲二郡が山間の僻地なるに、三五、五六の増加を示したるは蓋し一時的の現象ならん、そは數年來殊に大正十四年を頂點として伯備南線の工事あり土工夫の多數入來したるに起因するなるべし、大正十三年の統計は却つて他出入口の甚だ多きを示せり。

邑久、児島、淺口、小田各郡の減少したる理由の一は次の如くなるべし、四郡とも沿海地にしてその減少したる町村を點檢したるに、漁業の盛なるもの殆んどその中に含まる、思ふに國勢調査當時に於ては遠く出漁したるもの多き爲なるべし、殊に児島郡は縣内屈指の工業地にして造船、織物等の有

數なる産地なるは、大正十三年の統計に於て入寄留者の多きこと、又岡山市と共に現住人口が本籍人口を超過したるはその一證なり。

縣全體として増加率の少なきは次の二點に歸着すべし。

一、出産率の少なきこと

その理由は明ならざれど、近隣各縣に比して出産の少なきは明なる事實なり、即ち四歳以下の人口の千分率は左の如し。

島取 一三六 島根 一二七 廣島 一三五

香川 一三九 愛媛 一四一 岡山 一二三

尙ほ出産率は、郡市平均數を越ゆるもの悉く山地若しくは丘陵地なる町村なり、然れども本縣の死亡に對する出産の超過による人口の増加率は逐次増加の傾向を示せり、次はその一例なり。

明治二十年より二十四年に至る増加 四、九%

大正九年より十三年に至る増加 九、五%

二、他出入口の多數なること

岡山市、及児島郡を除きては各郡其他出入口極めて多し、中にもその%の多きは山地及丘陵地所在の町村なり、川上郡は本籍人口に比し現住人口尤も少なし、こは本郡は吹屋の銅山も廢坑同様となり、田反別も少なく、本縣中生産額も亦尤も少なきもの、一なればなり。

本縣に於て他出入口の多くなりはじめたるは明治三十八年以後なるが如し、即ちそれ以前にありては概ね本籍人口に對する現住人口は百分中百を超えたるに以後反對の現象が次第

に濃度を加へ來れり。

明治三十六年

一〇〇、五

明治四十一年

九九、四

大正二年

九七、〇

同 六年

九五、八

同 十一年

九二、八

而して他出の方向は概しての如し。

一、水流と同じく北より南へ、即ち山地より平地へ。

縣當局者が小學校教員のこの傾向の移動に對して頭を觸ませるは有力なる證明なり、即ち交通の便利なる、沿幹線鐵道附近への移動なり。

二、農村より都市へ、

蓋し全國一般的の現象なり、細別すれば

農村より附近の小都市へ

更に 大都市へ 大工業地へ

本縣々内出寄留人口十一萬人 他府縣へ十三萬人

三、海外へ

植民地は朝鮮の九千人を最高として合計一萬三千人
外國移住は一萬人にして、米國の六千人を最多とす
出寄留者總計二十八萬三千人(大正十三年)なり。

郡市別人口移動總覽 (三)

郡市	地形	要項		大正十三年	十四年度	主要都會
		増	減	生、死、入、出、寄留、他出、本籍、現住	密、度、方	
岡 山 平 地	三、七	三、七	三、七	六、五	二、八	西大寺
上 久 山 地	二、五	二、五	二、五	六、〇	三、二	味野
兒 島 同 地	三、二	三、二	三、二	五、五	三、〇	三津野
和 氣 山 地	三、三	三、三	三、三	四、七	三、〇	下津野
赤 磐 同 地	二、八	二、八	二、八	三、三	二、二	瀬戸
御 津 同 地	六、九	六、九	六、九	四、二	三、〇	金川
都 窪 平 地	三、七	三、七	三、七	三、七	二、八	倉敷
淺 口 同 地	二、五	二、五	二、五	七、五	八、九	玉島
吉 備 同 地	七、三	七、三	七、三	七、三	八、四	總社
小 田 丘 陵 地	九、七	九、七	九、七	五、〇	九、二	笠原
後 月 同 地	二、三	二、三	二、三	一、〇	八、九	井原
上 房 山 地	二、五	二、五	二、五	九、九	八、三	高梁
川 上 同 地	二、五	二、五	二、五	三、三	一、六	成羽
阿 哲 同 地	二、六	二、六	二、六	三、三	一、六	新見
勝 田 平 地	二、八	二、八	二、八	二、二	八、九	津山
英 田 丘 陵 地	二、八	二、八	二、八	二、二	八、九	勝間田
久 米 同 地	三、〇	三、〇	三、〇	二、九	一、六	林野
真 庭 同 地	九、九	九、九	九、九	七、七	一、八	福渡
全 國 同 地	八、八	八、八	八、八	四、三	二、七	山
全 國 同 地	七、七	七、七	七、七	三、三	二、四	

備考

出入人口と生産増加とを加減したるものが本籍、現住人口比に一致せざるは現住人口を基礎として千分率を求めたる偽めり。(岡山支部小館軍三報)

○巴奈馬通過船舶

本年二月中パナマ運河通過船舶數四四九隻、小蒸氣船二十八隻にして、前者の通過料は一、九九四一、八六〇弗餘、後者の通過料は一四二弗四一仙合計一、九九五、〇〇三弗二三仙に上れり。故に一日平均通過船舶數は一六隻〇三にして一日平均の通過料は七一、二四五弗三仙なり。商船一隻の通過料は四四三弗九〇仙に上る、これは一月中の平均通過料四四八〇弗二七仙に比し三六弗三七仙の減少なり、又太平洋より大西洋に向けて同運河通過船舶數は二百隻にして、大西洋より太平洋に向へるものは二百四十九隻に上れり。

一九二六年七月以後一九二七年二月迄の通過船舶數は三、五八九隻にして通過料一五、九〇九、二六一弗に上り一日平均一五隻内外の通過收入六五、四七〇弗なりといふ。

○世界に於けるラデオ放送局の數

一九二六年八月の調査

國別	局數	國別	局數
瑞典	二二	ノルウェー	二
丁林	四	アイスランド	一
芬蘭	八	エストニア	一
ラトヴィア	一	イギリス	二〇
愛蘭	一	ドイツ	二一
白耳義	三	ルガセンブルグ	一

和蘭	二	波蘭	一
埃地利	二	瑞西	一
致須	三	洪牙利	二
フランス	二	西班牙	二
ホルトガル	一	伊太利	二
エーゴスラヴィア	一	ロシア	二
カナダ	四七	アラシカ	一
ホルドリコ	一	メキシコ	一九
アルゼンチン	八	チリ	一六
支那	二	朝鮮	一
日本	三	蘭領東印度	一
ヒリツピン	二	印度	七
セイロン	一	オーストラリア	二四
ハワイ	一	アルセリア	一
モロツコ	一	チエニシア	二
カナリア島	二	南阿聯邦	三
玖馬	一八	サルヴァドル	一
ベリウ	一	ブラジル	一四
ウルガイ	二	パラガイ	一
米國	不明	但受信器合計五、五〇〇、〇〇〇にして世界第一なれども免許又ば登記を要せず調査不精確なりといふ。	

○世界原油生産量

(一九二六年)

合衆國	七七五、〇〇〇、〇〇〇	毎百分比	七〇、七
メキシコ	九〇、〇〇〇、〇〇〇		八、二
露國	六一、〇〇〇、〇〇〇		五、五
グエネズエラ	三七、二二六、〇〇〇		三、四
波斯	三五、四六〇、〇〇〇		三、二

ルーマニア	二三、二九九、〇〇〇	二、一
蘭東印度	二二、二二〇、〇〇〇	二、〇
秘露	一〇、七八二、〇〇〇	一、〇
印度	八、七二八、〇〇〇	〇、八
亞國	六、五〇〇、〇〇〇	〇、六
コロンビア	六、四四六、〇〇〇	〇、六
ホーランド	五、八三五、〇〇〇	〇、五
トリニダト	五、九七一、〇〇〇	〇、五
サラワク	四、三〇〇、〇〇〇	〇、四
日本	一、九〇〇、〇〇〇	〇、二
埃及	一、一六一、〇〇〇	〇、一
其他諸國	一、五〇〇、〇〇〇	〇、二

○プリンス、ルバート港

歐洲大戰以後西部加奈陀の

材木、漁業、鑛業等の生産業が發達著しく、殊に奥地平原三州の小麥の生産が跳躍的發達を遂げたにつれて、運賃の改正やら、パナマ運河の利用で、加奈陀太平洋岸の貿易が發達するやうになつた。所がこの沿岸六〇〇哩の間で南のバンクバーと此のプリンス、ルバートの外に良港がない。バンクバーは二千百萬英町の小麥生産地を背後に有し、加奈陀太平洋及加奈陀大北鐵道の兩幹支線をもち天然の良港である上に埠頭が廣くて港が大きいから非常な勢である。しかしプリンス、ルバートの方もこの頃其の港灣設備に注意し、CNR鐵道の終點として港灣設備を改良してきた。ことにこの港は大圈航路から見て横濱バンクバーの距離に比して約五〇〇哩近いから

二日間の航程を縮めうる利がある。たゞ位置が北緯五十二度半以北にあるから、出入船舶の保險率が割高となる缺點がある。CNR鐵道も經營不振であり、其背後地のヒースリバー地方の農業開發が思ふやうにならぬので、到底バンクバーには勝てないと見られてゐる。しかし北米の小麥生産地は東から、西へ移動するの形勢にあるから、アルバート州やB、C州の農業が盛んになれば、或は太平洋岸の良港として國際的の價値を發揮するに至るであらう。目下同港の主要航路は、加奈陀沿岸線でバンクバーとHeadsport港に至るもの、遠くアラスカの Unalakleet に至るものと、クエーン、シヤロット島に至るものがあつて、アラスカへの沿岸航路の中心である、昨年始めて日本の國際汽船會社から二隻の船がこゝに来て、パナマ經由漢堡行の小麥を積取つたので世人の注意を引いた夏期六月から九月中旬までの間、アラスカ觀光船が出るので便利だと稱せられてゐる。

○サラワク王國の貿易

一九二五年度の同國貿易は輸

出入總額七七、〇八四、〇〇〇弗に上り、三四、九三八、〇〇〇弗の輸出超過であつた、増加率前年度の二割二分に上る輸入貿易は米が年々増加する、これは謾談界が好況な結果で土人が米作をやめて専らゴム栽培にかゝるからで、移民の増加によるのではない。米以外に煉乳蒸溜乳が前年度に比し八千兩増した砂糖、茶、珈琲、ビスケット、製粉、絹織物等も増加した、靴、時計、陶磁器、硝子製品、帽子綿糸縫糸等が目立つて輸入されるのは、一般景氣のよい證左である、輸出

の中ゴムが價格増加のため二百五十萬弗からも増加した、領内最大多數の公民はこのゴムで生活してゐるのである、政府はサゴの栽培をすすめたけれども、ゴムの方が利益が多い、ゴムの外に、カツチ、シエルトン、サゴ粉、胡椒等主として熱帶農産物が輸出される。

○歐米主要國產炭額と英國炭

最近倫敦の商務省は

歐米の主要石炭產出國の一九二五年及一九二六年中の毎月平均石炭產額を對比した表を出した。

月別產額單位二千噸	佛	ザール	白	獨	米	英
一九二五、一ヶ月平均	三八五	一、〇六五	一、八七〇	一、八四四	一、九四三	一、五五
一九二六、一ヶ月平均	四、三六	一、三三	一、〇七六	一、九四九	一、三三〇	一、五五

本比較表によるときは、英國炭坑夫組合首領等が力説した英國石炭は世界的に必要缺くべからざるものであるとの議論が最早過去の夢であることが明かとなつたのみならず、世界は英吉利の炭坑罷業によつて何等不便を感じなかつたと見てよい、一九二六年に英國内には五月から十一月まで炭坑夫の罷業があつて輸出が出来なかつた、が從來英國石炭の最大顧客である所の佛蘭西の如き五月には三百八十萬四千噸であつたのに、漸次増加して其急を救ひ、十二月には四百四十八萬噸になつた、白工義の如きも五月と十二月の產出高は百八十一萬噸から二百三十三萬八千噸に増加し、獨逸も亦千五十萬噸より千三百五十萬噸になつた、米國も五月には四千二百萬噸

であつたのに十二月には五千八百二十五萬噸に増加した、これ皆、英國炭の產出減少、輸出不振によつて、世界各國が競ふて其の埋め合をやつた証據である。英國の炭坑罷業は一九二六年十一月に終つて十二月には一九、五五二千噸を出したがさればとて是等諸國が、其の石炭產出額を増加せんが爲めに施したる設備若くは努力が、そのために中止されるといふことはないのであるから、却つて其の増加石炭に對する市場を求むることに就て、益々奮闘努力すると思はれる。蓋し、英國石炭業者の立場は愈困難となつてきたのである。

質疑應答

(問) 三河灣の成因

野口喜一

(a) 伊勢海との成因上の關係如何
(b) Median Line との關係

(答) 知多灣及び渥美灣を總稱せる三河灣は渥美半島に依つて太平洋と距てられて居る。此の渥美半島は實に西南日本外帯に屬する地域であつて、渥美灣北岸は花崗岩及花崗片麻岩の廣き露出に依つて西南日本内帯に屬する地域たる事が明瞭である。従つて矢部博士の所謂 Median Line は實に渥美灣の何處かを北北東より西南に走つて居るのであつて、大觀すれば瀬戸内海の東方延長に當る内海である。然し此處が三河灣及伊勢灣として存在する理由は若狹灣、琵琶湖及び此の伊勢灣、三河灣を含む地域が東南に延長する陷沒地帯である